

# ノーヒーロー・マイスタンダード —NO HERO MY STANDARD—

## ◆登場人物

- ◇鳴屋京一（なるや きょういち）
- ◇千佳ちゃん
- ◇吾妻東吾（あずま とうご）
- ◇ガドー
- ◇センパイ
- ◇マルミ
- ◇アットウ仮面
- ◇担当
- ◇協会会長
- ◇協会職員
- ◇議員A
- ◇議員B
- ◇議員C

## ◆その他キャスト

- ◇アナウンス
- ◇ラジオ放送
- ◇ヒーロー派遣所の職員たち（数名）
- ◇その他ヒーローたち（2名）

## ◆舞台設定

- おもに2つのエリアを使用
- ◇パイン・アップル
- ◇その他エリア

※その他エリアは「会議室」「ヒーロー派遣所」「戦闘区域」などシーンによって変化させる。

☆プロローグ  
エリア…その他（会議室）

◆ホリゾント幕（または大黒幕）の中央に、地球が浮かび上がる。  
その下で薄暗い中、数人の議員たちとヒーロー協会長が会議をしている。  
協会長の背後にはアットウ仮面が立っている。

議員A 「いよいよ、地球も終わりなのか」

議員B 「何を弱気になってるんだ。まだ手立てはあるはずだ、何か」

議員C 「何かといっても、我々地球側が持つ軍勢力では

太刀打ちできなかったじゃないですか」

議員A 「やはり、降伏するしかないのか・・・怪人に」

議員B 「ダメだ！ここで怪人どもに降伏してしまったら、歯止めが利かなくなる」

議員C 「それは、降伏しなくても同じことでしょう」

協会長 「ヒーロー協会として、何か対応策はないんですか？」

議員B 「：正直、これといった名案はありません。しかし、妥協案なら」

議員B 「なんだね？」

協会長 「協定を結ぶんです」

議員B 「なに？」

協会長 「外宇宙の怪人たちの目的は地球侵略です。ですから、限られた地域での侵略活動を

容認することを交換条件に、居住区への攻撃を停止してもらおう」

議員B 「なにを言い出すかと思えば。一部の怪人が申し入れてきたふざけた協定の

話じゃないか」

議員C 「そのどこが妥協案なんです？」

協会長 「その申し入れにこちらも条件を出します。地球外の物資供給とテクノロジーの

開示を要求します」

議員A 「条件なんか出して状況が悪化しないだろうか」

協会長 「相手も疲弊しているはずです。軍勢力はあちらが上回っていますが無傷では

ありません。こちら側と同じく、多くの犠牲が出ているのは明白です」

議員B 「納得できません。無遠慮に踏み込んできたやつら相手に頭を下げるなど。

他に無いのか？」

協会長 「私には、ありません。プライドを捨てるか、滅びるのを待つか。

今はその2択なんです」

議員B 「ヒーロー協会もたいしたことはないな。

おい、そのヒーローお前が何とかできないのか」

◆アットウ仮面何か言おうとするが、協会長がさえぎる

議員B 「黙ってないで何とか言ったらどうなんだ」

議員C 「もうやめましょう」

議員B 「みなさん、いいんですか？ヒーローが戦うことを投げ出し、

侵略を認めると言い出す。私には到底受け入れがたい思考回路だ。

死ぬまで戦う、それが使命だというのに」

議員A 「すこし黙りなさい！お願いですから」

協会長 「ご判断はお任せしますよ」

◆議員A、少し考える

議員A 「協会長、あなたの意見を全面的に支持します」

議員B 「なっ」

議員C 「私も賛成です」

議員B 「：くそ、腑抜けどもめ」  
議員A 「交渉の細かい条件などは政府と調整します。  
(議員Cに)協定申し入れの準備をお願いします」  
議員C 「わかりました」

◆議員C、去る

協会長 「当日の交渉には私どもが当たります。要人には同席いただきますが  
警護もお任せください」

議員B 「これで地球が減びたら、お前達の責任だぞ」  
協会長 「(議員Bに)ですので、あなた方は椅子に座って手をこまねいてください。  
では、失礼します」

アットウ 「私がいるからにはもう大丈夫。ダブルオッケーだ！」

◆協会長、微笑む

議員B 「何のつもりだ？テレビ向けのショーでもする気か？」

アットウ 「安心してください。あなた達のことは全力で守ります。それが私の使命ですから」

議員B 「当たり前だ」

協会長 「それでは」

◆協会長、アットウ仮面去る  
明り切り替わり、その中に協会長とアットウ仮面が入ってくる。

協会長 「すまないな」  
アットウ 「どうしたんですか？」

協会長 「いつも君ばかり現場に駆り出すことになってしまって」  
アットウ 「仕方ありませんよ。まだヒーローの数も少ないですから」

協会長 「今度の交渉がもっとも危険かもしれない。決裂した瞬間に地球は終わりだ」  
アットウ 「大丈夫です。なんとしても我々ヒーローがそうはさせません」

協会長 「頼もしいな」  
アットウ 「それに、今は危険な仕事でも、いつか誰もがヒーローになれる時が来ると  
思います」

協会長 「だが、現実には厳しいだろう」  
アットウ 「一人の手が届く範囲は狭い。だからみんなが少しずつヒーローであれば、

協会長 「世界は変わると思うんです」  
協会長 「そうだな。私達がそうしていかなければいけないな」

協会長 「まずは今を乗り切るばかりですね」  
協会長 「ああ。すこし憂鬱ではあるがね」

アットウ 「私 came 来たからにはもう大丈夫。ダブルオッケーだ！」

◆協会長、アットウ仮面の肩に手を置き笑う

◆暗転

☆第1場

エリア…その他（ヒーロー認定式典会場）

京一と吾妻、そして数人が椅子に座っている。

アナウンス「それではこれより、ヒーロー証明書の授与式を行います。本日はご来賓の方を代表して、ヒーロー協会職員の方から祝辞をいただきたいと思えます」

◆協会職員が現れる。

協会職員「本日はおめでとうございます。これであなたたちも晴れてヒーローになる訳ですが、私から大事なことをひとつ話させてください」

◆手に持っていた祝辞の紙を開く。

協会職員「これからヒーローとして活動するときに、一番大切にしてほしいことがあります。それは、『学ぶ』ことです。世に輩出された先輩ヒーロー達の意志を継ぎ、活躍してくれることを願います。元祖ヒーロー『アットウ仮面』が活躍した時代から長い年月が経ち、今ではヒーローも一般の職業となりました。しかし、どんなに形が変わろうとも本質的な部分は変わりません。ヒーローは『仕事』ではなく『使命』なのだとか心に刻んでください。S級ヒーローになった暁には、アットウ仮面と同じような協会特性のヒーロースーツが支給されます。立派なヒーローを目指して頑張ってください。以上をもってお祝いの言葉とさせていただきます」

アナウンス「ありがとうございます。続きまして、卒業生代表による挨拶をさせていただきます。代表の生徒は壇上へ」

吾妻「ねえ君。今日からお互いヒーローだね」

京一「え、ああ」

吾妻「君、名前は？僕は吾妻東吾」

京一「鳴屋京一です」

吾妻「よろしく。ところで京一は何でヒーローになったの？

「僕はね、ヒーローになればモテると思ってたんだけど、今のところ実感ないかな」「はあ。特に理由はないですよ。」

京一「子供の頃、みんなが憧れてた仕事に就けるならいいかなって」

吾妻「ふん。京一の能力ってなに？」

京一「俺の能力はレプリケーション3です」

吾妻「エスプレッソコーヒープリーズ？」

京一「わざとですよ？レプリケーション3です。他のヒーローが目の前でやった技をコピーすることができるんです。ただ俺のやつは量産型なんで、使用回数はたったの3回しかないんですけどね」

吾妻「なんでオリジナル買わなかったの？」

京一「無理ですよ。値段知ってます？マンション一棟建ちますからね」

吾妻「へえー」

京一「吾妻さんの能力は？」

吾妻「レスキュー10。どんな怪我でも治せるのはいいんだけど、使どころがね」

京一「10日に1回しか使えないってやつですよ？」

吾妻「使った後死ぬほど腕が重くなるのもね。でもバリバリ倒す系の能力より好きだけど。」

京一「じゃあ、同期同士よろしく」

吾妻「ええ、またどこかであったときはよろしく願います」

◆立ち上がって握手するふたり。

やがてシルエットになり、歩き去る二人の姿をバックにオープニング。

☆第2場  
エリア…「パイン・アップル」

◆京一と吾妻が座っている。京一は雑誌を読んでいる。カウンターの中にはセンパイ。吾妻はスマートフォン画面を見つめている。その後ろにマルミが立ち、覗きこんでいる。別の席にはブラックコーヒーを飲んでいる男（ガドー）が座っている。

センパイ「マルミ、ちょっと手伝って」

マルミ「ええ」

センパイ「たのむよ」

◆口元でからっぽのグラスを飲むそぶりで傾ける京一。となりで携帯をいじる吾妻。面倒くさそうにカウンターに入るマルミ。

センパイ「二人とも最近どうだ？」

吾妻「最近ですか」

センパイ「お前達もうベテランだろう。活動は順調か？」

吾妻「そりやもう、今日も申し込んできましたよ」

センパイ「お、いつ行くんだ？」

吾妻「今日の夜です」

センパイ「相手のレベルは？」

吾妻「それがまだわからなくて。担当が言うにはA級だって」

京一「A級?!」

センパイ「A級?!」

京一「相手はどんなヤツだ？」

吾妻「恥ずかしいな。28歳OL。趣味はボルダリングと料理だって」

京一「・・・・・・」

吾妻「ひとりだと緊張するから京一も来る？」

京一「行かない」

吾妻「あつそ。あ、写真見る？」

マルミ「見たい!」

◆吾妻とマルミは携帯の画面を見ながらニヤニヤしている。京一はあきれて、自分の携帯を確認する。なにも通知がないことにため息をつく。コーヒーを飲み終えた男（ガドー）がレジにやってくる。

ガドー「お願いします」

センパイ「はいー。650円になります」

ガドー「（おつりを受け取って）どうも」

センパイ「ありがとうございました」

◆センパイは男を見送りながら小首をかしげる。

男（ガドー）去る

マルミ、ガドーの飲み終わったカップをさげようとして倒す。コーヒーがこぼれる

マルミ「あく、やっちゃった。おじさん」

センパイ「はい」

◆センパイ、コーヒーに向かってバニシングを放つ。

吾妻 「コーヒーが、消えた」

◆吾妻、布巾で床を拭く

吾妻 「コーヒーが、つかない。今のは？」

センパイ 「じいさんから受け継いだ能力『バニシング』だ」

吾妻 「すっげー」

マルミ 「はいはい、どうも〜」

◆マルミ、カップをさげる。  
携帯を見ている京一。

センパイ 「今日、面接あるのか」

京一 「はい、午後から」

センパイ 「相手のレベルは？」

京一 「たぶんC級です。なかなか担当さんが引き合わせてくれなくて」

センパイ 「どこも厳しいんだろう。そう落ち込むなよ」

京一 「落ち込んでないですよ」

◆再び携帯を見る京一

吾妻 「千佳ちゃん？」

京一 「え？違うよ。担当さんからのメール待ち」

マルミ 「嘘だよ、これ」

センパイ 「マルミ」

マルミ 「じゃ、いつてきます！」

センパイ 「気をつけろよ！」

京一 「俺もそろそろ行きます」

◆去り際に吾妻を見て立ち止まり。

京一 「吾妻、頑張れよ」

吾妻 「ありがとう。京一もね」

◆京一別のエリアへ。

電話をかける京一。

京一 「もしもし、千佳？あの、今日の夜、飯でも食いにいかない？…そっか、仕事か。

ごめん、また連絡する。あ、明日の昼は？うん、うん。本当？じゃあ明日駅まで

迎えに行くよ。うん、それじゃ仕事頑張って」

☆第3場

エリア…その他（ヒーロー派遣所）

◆窓口があり、そこに職員が座っている。

京一は呼ばれてから、少しくたびれた様子で入ってくる。

担当 「番号札298番の方、どうぞー」

京一 「お疲れ様です。お願いします」

担当 「お疲れ様です。少々お待ちください」

◆担当、手に持っている電子機器を操作する。  
するとすぐに京一が携帯の画面を確認する。

担当 「振込みメール届きました？」

京一 「来ました。…あれ？これ、金額合ってますか？」

担当 「え？見せてください。合ってますよ」

京一 「そう、ですか。…あの、やっぱりB級まわしてもらうのって厳しいですか？」

担当 「うーん…。どうしたんですか、急に」

京一 「いやちよつと買いたいのがあつて」

担当 「そうですか。(端末を見ながら) すこし気になってることがあるんですが」

京一 「はい」

担当 「何で、能力使わないんですか？今まで一回も使ってないですよね？」

京一 「それは、使わなくてもやって来れましたし」

担当 「でも、能力使用の実績があればもっと怪人の紹介もしやすくなるんですが」

京一 「そうですね」

担当 「ええ、能力を使いこなせれば戦力になるので」

京一 「でも、なんかもつたいなくて。3回しか使えないので」

担当 「じゃあ、いつ使うんですか？」

京一 「今で、ないことは確かですね。それで、次はA級かB級の怪人を

お願いできませんか？」

担当 「そうですね…そこまでいうなら探して見ますけど」

京一 「ありがとうございます！」

担当 「でもA級は無理ですよ？今どき死なれでもしたら、ウチが営業停止になっちゃうんで。じゃあ、また明日中に連絡しますので」

京一 「お願いします」

◆京一、頭を下げ担当が立ち去るのを見送る。  
携帯を取り出し、画面を確認する。

京一 「まだ指輪は無理かな…」

☆第4場

エリア…「パイン・アップル」

◆吾妻とマルミが並んで座っている  
センパイはカウンターの中から見ている

吾妻 「映画、面白かったですね」

マルミ 「ええ。これからどこに行くの？」

吾妻 「どこだと思う？」

マルミ 「えー、わかんない」

吾妻 「当てるよ」

マルミ 「うーん、どこだろう？もしかして100万ドルの夜景を見に？」

吾妻 「ふふ、どうかな？着いてからのお楽しみさ」

◆車から降りるようなフリをする二人

吾妻 「着いたよ。コレを君に見せたかったんだ」

◆花火の打ちあがる音

マルミ 「わー、綺麗！」

吾妻 「き、きき、きみの方が、き、きき、き、綺麗さ！」

◆吾妻、席に戻りグラスの中身を飲み干す

吾妻 「僕の何がいけなかったんだー！」

マルミ 「なにやらせんものよ。だいたい初デートから重いんだって」

センパイ 「マルミ……(首を横に振る)」

マルミ 「だって気持ち悪いもん」

吾妻 「ひどい！」

マルミ 「吾妻ちゃんは普通でいいのに」

吾妻 「センパイ、やっぱ俺みたいないなC級ヒーローじゃダメなのかな？」

◆京一、千佳を連れて登場

センパイ 「いらっしやい。お！千佳ちゃん、久しぶり」

千佳 「お久しぶりです」

京一 「なににする？俺、パイナジュース」

千佳 「じゃ、私はコーヒーください」

京一 「コーヒー？珍しいね」

千佳 「(軽くうなづく)」

◆吾妻たちから少し離れた場所に座る京一と千佳。マルミ、一冊の本を手に取り、読み始める。

吾妻 「あ、それアットウ仮面の本？」

マルミ 「うん」

吾妻 「あれ？ヒーロー興味あったっけ？」

マルミ 「別に」

センパイ 「最近急にヒーローになるって言い出したんだよ」

吾妻 「え？マジで？」

センパイ 「ようやく気づいたようだ。俺のかつこよさに」

マルミ 「はあ？ぜんぜんそんなじゃないし」

センパイ 「照れるなよ」

マルミ 「本当に違う。第一おじさんのヒーローネーム超かつこ悪いじゃん」

センパイ 「子供にはわからないだけだよ」

吾妻 「何でしたっけ？」

センパイ 「戦場のパイナップル」

マルミ 「ほらダサイ」

センパイ 「馬鹿にすんなよ？パイナップルには『完全無欠』って花言葉があって」

マルミ 「いいから、仕事してください」

センパイ 「おまえなあ」

◆センパイ、コーヒーとパイナジュースを京一たちの席へ持っていく。京一と千佳は笑っている。

京一 「で、パイナッブルの花言葉が……」

センパイ 「お前も馬鹿にしてるのか？」

京一 「え？違いますよ」

センパイ 「どうだか」

京一 「やめとこう」

千佳 「うん」

◆千佳の携帯が鳴る。



千佳 「ちょっとゴメン（電話に出る）」  
吾妻 「京一」  
京一 「くっせ！飲みすぎだろ、おい」  
吾妻 「わたくし、アズマトーゴ、30歳独身。今回もダメでした！」  
京一 「ぎらぎらしすぎなんだよ。目が」  
吾妻 「そんなことありませんよ。ほら優しい目」  
京一 「気持ち悪い。あっちいけ！」  
吾妻 「だれでもいいから紹介してよ！」

◆マルミ、京一に近寄り

マルミ 「千佳ちゃん、なんか変だったね？」  
京一 「どこが？」  
マルミ 「気づかなかった？だめだなあ」  
京一 「どういことだよ」  
吾妻 「どういことなんですか」  
センパイ 「お前飲みすぎだ。バニシング！」

◆センパイ、吾妻に向かってバニシングを放つ。

吾妻 「酔いが、消えた。どういことなんですか？」

◆千佳が戻ってくる。

千佳 「ごめん。ちょっと仕事で戻らないといけなくなっちゃった」  
京一 「え？もう帰るの？」  
千佳 「ごめんね。（伝票を取り）お会計お願いします」  
京一 「次、いつ会える？」  
千佳 「また連絡するね」  
京一 「あ：うん、気をつけて」

◆千佳、店を出る。京一、席に戻り千佳が残したコーヒーを飲み苦い顔をする。  
◆暗転

☆第5場  
エリア…「パイン・アップル」

◆夕方、学校から帰ってきたマルミが席で携帯を見ている。客はいない。カウンターにはセンパイが立っている。

京一、登場。颯爽とカウンターについて

センパイ「いらっしやい」

京一「マスター」

マルミ「マスターって誰？」

センパイ「俺だよ」

京一「この店で一番いいパインジュースを」

マルミ「なんかいいことあったの？」

京一「…（ゆっくり視線を送り）とれた！B級怪人！」

センパイ「お！」

マルミ「おー！やったじゃん」

京一「担当さんが、B級でもほぼC級みたいなのを派遣してくれるって。これから忙しくなるよ」

センパイ「よかったじゃないか」

京一「やっぱヒーローになったからには上を目指さない」と

◆言ったその顔はわずかに悲しげ。

そこへヒーロー「シノノメ」の格好のまま、吾妻登場

吾妻「ふおおー!!!」

マルミ「びっくりした！なに？誰？」

吾妻「やったー！彼女が、できたあー！」

マルミ「吾妻ちゃん？」

京一「そっか、マルミは変身してる吾妻初めてか？」

センパイ「普段、見ることないからな」

吾妻「（マスクをとって）京一！（抱きつく）」

京一「あゝ気持ち悪いな。なに？」

吾妻「彼女できたんだよ。運命だよ。奇跡だよ」

センパイ「良かったな」

京一「今度はどんな子？」

吾妻「聞きたい？」

京一「言いたいんだろ」

吾妻「それが、今までに味わったことないような安堵を感じるんだよ。見た目がかわいいとかじゃなくて、自然体でいられる感じ」

京一「へえ」

吾妻「芸術家肌で絵を描いているらしいんだけど、今度個展を開くんだったって」

京一「ほー」

吾妻「絵に興味ないかって聞かれたけど、俺そういうアーティストイックな

感性ないじゃん？でも、応援したいじゃん？」

京一「はいはい」

吾妻「感性磨いて一緒に楽しむためにも絵を買わないかって展示会に誘われたんだけどさ

京一「…ねえ、コレって恋人商法かな？」

センパイ「パインジュースまだかな？」

吾妻「はい、お待ち（ジュースを差し出す）」

センパイ「聞いてた？」

吾妻「それで、買わされたのか？」

吾妻 「まだです。サインくださいって声かけられて」

◆京一の携帯が鳴り、電話に出るために離席する。

マルミ 「結局買わなければいんどしょ？まずは様子見たら？お付き合いたってことは、そこそこタイプだったようですし」

吾妻 「なんか怒ってる？」

マルミ 「別に。だまされるのも人生経験だから一回くらいいいんじゃない？」

センパイ 「吾妻、変な書類にはサインするなよ」

吾妻 「やっぱ、だまされるのか」

◆京一、戻ってきて黙って席に座る。

京一 「・・・」

マルミ 「どうしたの？」

京一 「いや、なんも」

マルミ 「電話、何だったの？」

京一 「ん？次の次まで仕事が入ったんだよ。よし、バリバリやるぞ」

センパイ 「そーいやコーヒー豆切れそうだった。マルミ、いつもの買ってきてくれ」

マルミ 「え？でも・・・うん」

◆マルミ、センパイからお金を手渡され出て行く。

センパイはホットコーヒーを二つ準備している。

センパイ 「・・・」

吾妻 「京一は仕事も恋も順調でいいよな」

センパイ 「吾妻」

吾妻 「どうせいいことないし、僕ヒーローやめようかな」

センパイ 「なんだ、だまされたくらいで」

吾妻 「まだ、だまされてないです！」

センパイ 「まあ飲め」

◆センパイがホットコーヒーを吾妻の前へ差し出す。吾妻、一口すすする。

吾妻 「うえ。砂糖とミルクください」

センパイ 「俺も苦いのは嫌いなんだ（砂糖を差し出す）」

吾妻 「ありがとうございます」

センパイ 「でもたまにはほしくなる。・・・ちよつと昔の話していいか」

◆少しの間

センパイ 「マルミが5歳のとき。俺の弟が怪人の人質にとられてな」

吾妻 「・・・」

センパイ 「今は想像できないだろう？当時はそこらじゅうが戦場だった。

だから、ヒーローやっている以上そういうこともあると覚悟もしてた。

そうなくても俺は強い。だから絶対助けられるって、どこかおごっていたんだな」

京一 「・・・（手持ち無沙汰でグラスを触る）」

センパイ 「当時もランキングがあつて、それを気にしながら活動することも当たり前だった。

だから、なるべく目立つように、自分がいかにいいヒーローか見せるために、

ヒーローをやっていた」

吾妻 「それってなんかダメなんですか？」

センパイ 「弟とその奥さん、そしてマルミ。3人同時に人質に取られたら、

手も足も出なかった。あの時痛感したんだ。俺はヒーローになれていなかった。たじろく俺なんかお構いなしに、弟と奥さんが飛び出した。マルミを守るために」

吾妻 「じゃあ、弟さんは…」

センパイ 「ああ。…俺がそれまでやってきたことって一体なんだったのか。

身内ひとり守れないヒーローって何だって。それでヒーローはやめたんだ。だけど、だからこそやれることもある」

吾妻 「やれること？」

センパイ 「本質で『人を守ること』ができるのがヒーローだ。そのためにかならずしも大きな力はいらない。今、自分にできることを、今、やるだけなんだよ」

◆センパイ、二人の顔を覗き込んで

センパイ 「ダメなときは他のヒーローがいる。そのためにみんながヒーローになるんだろ？」

◆静かな間

京一 「結局、B級怪人は手配できないって、担当さんが」

吾妻 「さっきの電話？」

京一 「うん。部長の決裁がおりなかったって。『実力不足』なんだと」

吾妻 「実力ってなに？」

京一 「さあ？俺の本当にやりたいことって、何なんだろう？」

吾妻 「…京一」

◆マルミが戻ってくる

マルミ 「なにこれ？空気重っ！おじさん、豆買って来たよ。あ、お父さんがおじさんと一緒に、ご飯食べようだったって」

吾妻 「え？」

京一 「ん？」

マルミ 「どうしたの？」

京一 「お父さん、元氣？」

マルミ 「まあ元氣だけど」

吾妻 「センパイ」

センパイ 「なんだよ。嘘は言っていない」

マルミ 「何の話？」

センパイ 「豆の補充おねがい。それやったら帰っていいぞ」

マルミ 「はい。おじさん絶対来てよ」

センパイ 「いや、俺は店の片づけがあるから」

マルミ 「終わったら来てね」

◆マルミ、奥へ引っ込む。

京一 「…ありがとうございます。もう一度良く考えてみます」

吾妻 「僕も彼女との関係を見つめなおしてみます」

京一 「頭の中そればかりだな。うらやましいよ」

吾妻 「人生の軸足が君とは違うだけだよ！」

京一 「なにそれ」

◆店のラジオから警報音が鳴り響く。

ラジオ 「緊急災害放送。緊急災害放送。居住地区A23に怪人が襲来しました！  
出動可能なヒーローの皆様は、現場へ急行してください。繰り返します  
(同じ内容を小さい音量で繰り返す)」  
吾妻 「A23って」  
京一 「千佳！」

◆京一、飛び出す。

吾妻 「待って！」

◆続いて吾妻も飛び出す。マルミが店の奥から現れる。

マルミ 「どうしたの？」  
ラジオ 「繰り返します。居住地区A23に怪人が襲来しました！  
近隣住民の皆さんは、どうか慎重に身の安全を確保してください！」  
マルミ 「こんなことって・・・」  
センパイ 「ありえない。協定破りだ」

◆マルミ、駆け出だそうとする。

センパイ 「マルミ！おとなしくしていなさい」  
マルミ 「でも」  
センパイ 「お前が行ってどうする？」  
マルミ 「やだ！また、誰かに守られてるだけなんて」  
センパイ 「何言ってる」  
マルミ 「この前、お父さんに聞いた。小さいときの話」  
センパイ 「聞いたのか」  
マルミ 「本当にやりたいと思ってもできないのはいやだ。  
迷ってたら、その気持ちが逃げちゃうから。その思いから逃げちゃうから」  
センパイ 「でもダメだ」  
マルミ 「なんで！」  
センパイ 「店に残りなさい。お前は今できることをやるんだ」  
マルミ 「そんな大人のきれいごとみたいなこと聞きたくない」  
センパイ 「頼む、マルミ。お前は店番してくれ」  
マルミ 「・・・」  
センパイ 「かわりに俺が行ってくるから」

◆センパイ、店を出る。

☆第6場  
エリア…その他(戦闘区域)

◆下手にガドー、上手にヒーロー達が戦闘中。ガドーの背後には捕らわれた千佳がいる。ガドーが片手をゆっくりあげ、握りこぶしを強く握ると狙われたヒーローの身動きが止まる。握ったこぶしを強く突き出すと、吹き飛ばされる。もう一人のヒーローも狙われ、同様に突き飛ばされる。

ガドー 「本当弱いな。飼いならされた成れの果てがこれか！」  
千佳 「助けてー！」

◆必死にもがく千佳。体が縛られているため思うように動けない様子。そこへ、京一と吾妻が登場。

京一 「千佳!…なんでだ!よりによって」

吾妻 「やばいよ、どうしよう」

千佳 「京一!」

ガドー 「見ない顔だな?さては新人か?悪いことは言わないから住民と一緒に避難してな」

京一 「くそ、これでも10年選手だぞ!変身!」

吾妻 「それなら僕だって!変身!ねえ、これ怪我しないよね?」

◆二人、変身する。京一はマフラーを巻き、吾妻は仮面をかぶる。

ガドーは軽く首をかしげながら両手をゆっくり後ろで組み直立している。

京一 「バカにしゃがって」

◆飛び掛る京一をひらりとかわすガドー。つづいて吾妻も飛び掛るが、かわされる。一人ずつ2、3回攻撃を仕掛けるが、ことごとく受けられ、かわされる。

京一と吾妻がお互いに目を合わせ、いっせいに上段攻撃、下段攻撃を仕掛けるが、同時にかわされる。ガドーはにやつきながら、背中を向けた吾妻に蹴りを入れる。遅れて飛び掛ってきた京一に後蹴りを食らわす。吹き飛ばされた京一を、センパイが支える。

センパイ 「苦戦してるな」

京一 「センパイ」

センパイ 「無理ないか、ガドーだしな」

京一 「知ってるんですか?」

センパイ 「S級怪人だぞ?知らない方が不思議だよ。それに…(ガドーに向かって)久しぶりだな、ガドー。やっぱりお前だったか」

ガドー 「パイ。店はいいのか?」

センパイ 「おかげさまで」

吾妻 「知り合いですか?」

センパイ 「元ヒーローだ」

吾妻 「え?」

センパイ 「この前、店に来たときはわからなかったよ。顔がまるで違う」

ガドー 「昔の顔は捨てたんだ」

センパイ 「捨てた?なんでこんなことをしてるんだ?」

ガドー 「話したところでヒーローをやめたお前にはわからない」

センパイ 「だが、ほっとくわけにもいかない」

ガドー 「今のお前達になにができる」

◆先陣を切って吾妻が飛び出す。その横を抜けようとする京一。

吾妻 「アズMAX！」

◆吾妻の攻撃をかわしつつ、千佳へ近づこうとする京一の前に立ちはだかるガドー。京一の攻撃をかわしたところへセンパイが突っ込み、ガドーを吹き飛ばす。

ガドー 「少し遊びすぎたか」  
センパイ 「くるぞ」

◆ガドー、矢継ぎ早に攻撃を繰り返して来る。必死に受ける三人。隙について、吾妻と京一が両腕を取り押さえ、繰り返された蹴りをセンパイが取り押さえる。そこへマルミが現れ、千佳の元へ駆け寄る。

センパイ 「マルミ！何してるんだ！」  
マルミ 「千佳ちゃん大丈夫？いまほどこから」  
千佳 「マルミちゃん、あ、ちよつと」  
マルミ 「ん？これどうなってるの？」  
千佳 「ちよつとまって」  
マルミ 「うん、ちよつと待ってて」  
千佳 「…あー、取れたみたい！」  
マルミ 「え？」

◆それと同時にガドーに弾かれる三人。吹き飛ばされた京一たちの元に駆け寄るマルミと千佳。

京一 「千佳、怪我してないか？」  
千佳 「うん、大丈夫」  
京一 「お前になんかあったら、俺」  
センパイ 「すぐに安全なところに」  
マルミ 「うん」  
ガドー 「何をほつとしているんだ？」

◆ガドー、片手をゆっくり掲げると、小さな丸い光が現れる

ガドー 「疾風怒濤」  
センパイ 「まずい」  
吾妻 「なんですか？あれ」  
センパイ 「昔一度だけみたことがある。怪人数十人を一瞬で倒した大技だ」  
ガドー 「俺が今ここから世界を変える」  
吾妻 「すぐにみんな避難させないと」  
ガドー 「見てみる、パイ。今や怪人のたった一人の急襲に耐え切れないほどこの世界は弱体化しているんだ。お前が現役だった頃はこんなこと無かっただろう？」  
センパイ 「協定が守られれば問題なかったはずだ」  
ガドー 「相変わらず甘いんだな。外には、まだ協定を結んでいない怪人がごまんという」  
センパイ 「どういふことだ」  
ガドー 「だから気づかせてやろうと思った。協定など本当は脆いと」  
センパイ 「やめろ」  
ガドー 「ヒーローは現れるだろうか？」  
センパイ 「ガドー、やめろ！」

◆ガドーは遠くの方をめぐって疾風怒濤を放り投げる。

センパイ 「くそ！バニシング！」

◆センパイ、疾風怒濤に向かって手をかざす。半分ほどの大きさになる。

センパイ「一回じや無理か：：バニシング！あれ？あ！」

吾妻「どうしたんですか？」

センパイ「使用回数、一日2回までだった」

マルミ「おじさんのバカ！」

京一「バニシング！」

◆疾風怒濤が消える

吾妻「え？いま、京一がやったの？」

京一「：：たぶん」

マルミ「すごい！」

ガドー「ほく、その力は『レプリケーション』か。君のランクだとオリジナルではないな。使用回数はあと数回というところか」

京一「俺の力？」

ガドー「そうだな、後何回耐えられるか試してみるか」

センパイ「やめてくれ：：頼む。関係ない人は巻き込むな」

ガドー「力のないものに正義はない。昔から言ってるじゃないか」

吾妻「あ、あなたのものさしだけで量るの、やめてもらえますか？」

センパイ「吾妻」

ガドー「脇役はさがってな」

吾妻「かつちーん、確かにこの場面では脇役かもしれないけど、僕の人生の中では僕が主人公ですからね？言っておきますけど、どっちかって言うところとぼと出てきた

あんたのほうが脇役で」

◆ガドーが空中でこぶしを握ると、吾妻の身動きが封じられる

吾妻「ぐつ、あんたが言う力なんか僕にとっては無力だ！」

ガドー「うるさい」

センパイ「吾妻！」

◆吾妻気絶し、放り投げられる

マルミ「吾妻ちゃん！ちよつと、そこまですることないじゃない！」

◆ガドーが空中でこぶしを握ると、マルミが気絶し、その場に崩れる

センパイ「マルミ！」

千佳「女の子に手を上げるのはやめてよ」

センパイ「ガドー！！」

◆ガドーに飛び掛ろうとするセンパイ。しかし途中で身動きを封じられる。

ガドー「落ち着けよ。ちよつと気絶させただけじゃないか」

◆縛られながらもこぶしを繰り出すセンパイ。しかしその動きは鈍い。

ガドー「驚いた。さすがは一流ヒーローの孫だな。でも足りない！」

◆センパイ、殴られその場に倒れる



京一 「センパイ……」  
ガドー 「どうした？まだ逃げなくてよかったか？あ、君もヒーローか？  
あまり何もしないんで気づかなかったよ」  
千佳 「そんな言い方はやめて」  
京一 「大丈夫だから。千佳、すこし下がって」  
ガドー 「名無しのヒーローに用はない。悪いがそこどいてくれないか？」

◆京一、片手をゆっくり掲げると、小さな丸い光が現れる

京一 「疾風怒濤」  
ガドー 「そうくるか」  
京一 「千佳、みんなを頼む」  
千佳 「う、うん、わかった」

◆千佳がみんなを起こしに行く。それぞれよろけながら、京一の背後に来る。

ガドー 「名無しのヒーロー、そこをどけ」  
京一 「どかない。俺はまだヒーローだから」  
ガドー 「じゃあどうする？今すぐぶっ放してもいいんだぜ」

◆短い沈黙

ガドー 「何を迷ってる？」  
京一 「別に迷ってるわけじゃない」  
ガドー 「俺は悪で、お前は正義だ。表面上はな」  
京一 「……」  
ガドー 「こういうのはシナリオが大事なんだ。わかるか？」  
京一 「シナリオ？」  
ガドー 「そうだ。悪者はいつもルール無用のずるい攻撃を仕掛けてくる。そこに正義のヒーローが登場して、問答無用で悪をねじ伏せる。大義ってやつだ」  
京一 「何の話だ？」  
ガドー 「みんなの話だ。そして、俺たちの話でもある」  
京一 「これを放てばあんたも無事じゃいられない。何でそんなに落ち着いていられるんだ？」  
ガドー 「誰しも、悪をなそうとしているわけじゃないからだ」  
京一 「は？」  
ガドー 「今お前が何もしなければ俺は、この辺一帯を荒らしつくす。たくさん人も死ぬだろう」  
京一 「だからさせないって言うてるだろう」  
ガドー 「そのわりに動かないんだな。ためにあの女、ひねってやろうか？」  
京一 「ふざけるな！」  
ガドー 「選べ。名無しのヒーロー！」  
京一 「うあああ！」

◆京一、ガドーめがけて疾風怒濤を放つ

千佳 「だめ！」  
京一 「千佳?!」

◆ガドー付近に着弾する疾風怒濤。その爆発に巻き込まれる千佳。その場に倒れこむガドーと千佳。その威力にその場にいた全員がよろけ、転ぶ

千佳 「やっぱりこんなのいや」  
京一 「千佳！」  
千佳 「思い出だけで生きてくなんて無理よ」  
ガドー 「千佳っ…」  
千佳 「今、あなたがいなくなったら」  
ガドー 「喋るんじゃない」  
千佳 「ごめんなさい、京一、私ね…」  
京一 「千佳：千佳！いやだ！なんでだよ、何でっ」  
センパイ 「落ち着け！まずは安全なところに」

◆ぐったりした千佳を抱き起こし、ガドーから離れた場所に寝かせる。

マルミ 「ねえ、千佳ちゃん、大丈夫なの？」  
センパイ 「わからない、でもすぐに治療しないと危ないのは確かだ」  
吾妻 「僕的能力で少しだけ回復できるかも」  
京一 「頼む！なんでもするから、吾妻たのむ…」  
吾妻 「言われなくても。：レスキュー10！」

◆ゆっくり目を覚ます千佳

吾妻 「死ぬほど腕が重い」  
千佳 「う、うう…、京ちゃん、ごめんね」  
京一 「千佳！良かった」  
センパイ 「マルミ、すぐに病院に」  
マルミ 「わかった。京ちゃんも来て」  
京一 「…」  
マルミ 「京ちゃん！」  
京一 「：センパイがついてってくださいませんか」  
センパイ 「京一」  
京一 「俺にはまだ、やることある気がします」  
センパイ 「わかった」  
吾妻 「じゃあ僕も残るよ」

◆センパイとマルミは千佳を連れて去る  
ガドーがよろけながら立ち上がるが、すぐにひざをつく。

ガドー 「さすがの威力だ。かなり効いたな」  
京一 「立て」  
ガドー 「なんだ、怖い顔して」  
京一 「(ため息)まさか、相手が怪人だと思わなかった」  
吾妻 「え？だってセンパイがさつき怪人だって」

◆京一、腰掛ける

ガドー 「人を立たせといて、自分は座るのか？」  
京一 「そんならいいいだろ？人の彼女とったんだから」  
ガドー 「気づいていたか」  
吾妻 「え？」  
京一 「様子がおかしいのはなんとなく」  
吾妻 「えー！？千佳ちゃんが？京一と？この怪人と？」  
京一 「吾妻、ちょっと向こうで安静にしてて？」

吾妻 「そうだね。何かあったら呼んで」

◆吾妻、去る

ガドー 「…心配しないでくれ。それも今日限りで終わりにする」

京一 「なんだよそれ」

ガドー 「今日の計画が終わるまでたまたま協力してもらってただけだからな。

俺は自分の夢が叶えばそれでいい」

京一 「…ふざけんなよ」

ガドー 「君には悪いことをした」

京一 「知らなきゃよかった。最悪だよ。その上なんだよ『もう用済みだから返す』って」

ガドー 「そうは言っていない。俺のことは忘れて、また二人の道を進んでくれ」

京一 「は？何言ってるんだ」

◆再びひざまづくガドー

ガドー 「俺は、ここまでみたいだしな」

◆ガドーの胸ぐらをつかむ京一

京一 「なに勝手にくたばろうとしてんだよ」

ガドー 「鬼か君は」

京一 「…千佳のことはどうするつもりだったんだ」

ガドー 「君が幸せにしてやるんだろ？」

京一 「今日の計画って言ってたよな？ここでくだばるのも計画のうちか？」

ガドー 「さあね」

京一 「まじめに答えろ！」

◆京一、ガドーを突き飛ばす

ガドー 「さっきも言ったろう？ヒーローは君で、俺は悪だ。たくさん悪いことをしてきた。千佳や君に対してもそうだよ」

京一 「あんたはなにがしたかったんだ？」

ガドー 「それは、そのうちわかるさ。(咳き込み呼吸が荒くなる) そうだ、千佳のことは責めないでやってくれ。あいつは悪くない…」

京一 「だから勝手なこと言うな。千佳は、あんたといたいのかもしれない」

ガドー 「どちらが良いかなんて、考えるまでもないだろう！俺は悪人だ」

京一 「今更そんなの」

ガドー 「そう悲観するな、すべての時間が嘘だったわけじゃない。それに、これからは全部お前達の時間だ。悪かったな、名も無きヒーロー…」

◆ガドー、気絶する

京一 「くそ…くっつそ…くそおー！」

◆京一、片手をゆっくり掲げる

京一 「あんたの思い通りになんて、させるかよ」

◆暗転

☆第7場

エリア…「その他（センパイと吾妻の独白）」

センパイ「ガドーの『疾風怒濤』から3年。

あの事件から、これまでのヒーローと怪人のあり方は大きく変化し、ヒーローの仕事は10分の1まで減った。表面上うまく機能していた協定も、実は脆く危険なものだったと再認識され、怪人の侵略は著しく規制された。まさしく、激しい風と荒れ狂う波のように時代は姿を変えていった。

ガドーが狙ったとおりになったのかもしれない」

吾妻「でも、いつもそうだけど、僕にはその実感があまりない。ヒーローに砂糖を入れすぎると怒る人がいる。

『これはそういうものじゃない』って声を荒げる人がいる。

でも僕には関係ない。だから今もヒーローを続けている。

だけど、京一はあの後すぐにヒーローをやめた」

エリア…「パイン・アップル」

◆センパイがカウンターの中で食器を拭いている。吾妻はカウンターに座っている。

吾妻「はあー、仕事面倒くさいな」

センパイ「お前、店に来てダラダラしてるだけだったら帰れよ」

吾妻「お客さんに対してひどくない？」

センパイ「でしたらヒーローのおかわりいかがですか？」

吾妻「無料ですか？」

センパイ「アホか」

◆マルミが店の奥から現れる

マルミ「行ってきまーす」

センパイ「昼飯食べていかないのか？」

マルミ「うん、午後の講義間に合わないから」

吾妻「マルミちゃん、またちよつと大人の女性になったね」

マルミ「セクハラ」

吾妻「えー、今日なんか2人して冷たいよ」

マルミ「早く彼女作りなよ」

センパイ「そうだ、お前は早く結婚しろ」

吾妻「できるならしたいですけど？」

◆京一が店に入ってくる

センパイ「いらっしやいませ。京一！」

吾妻「京一！聞いてよセンパイとマルミちゃんがね」

センパイ「久しぶりだな。何ヶ月も来ないでなにやってたんだ」

京一「ずっと仕事が忙しくて。ヒーローください」

センパイ「あいよ」

マルミ「京ちゃん」

京一「マルミ、またちよつと大人になったか？」

マルミ「そう？ありがと。もう20歳だからね」

吾妻「なんか違うくない？」

京一「出かけるところ？」

マルミ「うん、午後から『ヒーロー兵学』の講義があつて。

面倒臭いけど出席数足りなくなっちゃうし」

センパイ「面倒臭いとか言うな」

マルミ 「だってやっぱ実技のほうが面白いんだもん。戦闘バリバリやって早く強くなりたいたい」

京一 「学校のこととはよくわかんないけど、頑張ってるな」

マルミ 「京ちゃんは今の仕事どう？」

センパイ 「はい、お待ち」

◆センパイ、コーヒーを出す

吾妻 「あれ？僕の分は？」

センパイ 「お前は早く帰れ」

吾妻 「ほら、冷たくない？」

センパイ 「トラック乗るのも大変だろう？」

京一 「(笑)大変ですよ。でも、楽しいです。いろんなところに行けるし、

吾妻 「楽しいならいいんじゃない？誰かの役に立たなきゃいけないってわけじゃないし」

センパイ 「そうだ。最近、千佳ちゃんとは会えたか？」

京一 「…あれから一回も会ってません。今の仕事、1人の時間も多くて、そのおかげで

昔のことはなんとなく気持ちの整理が果たってというか。もういいんです」

マルミ 「千佳ちゃんはそうでもないみたい」

センパイ 「そうそう、たまに来るんだ。この店に」

吾妻 「なんかこれフラグ立ってない？」

◆千佳が店に入ってくる

千佳 「こんにちは〜」

吾妻 「ほら、すぐくない？」

千佳 「京一？」

京一 「千佳！…ごちそうさま、お金ここ置いとくから」

千佳 「京一、どこ行くの？待って、待ってってば！」

京一 「…」

マルミ 「私、そろそろ出なくちゃ。行ってきます」

◆マルミ、店を出る

センパイ 「確か豆が切れてたような。吾妻、ちよつととってきてくれないか」

吾妻 「え？せつかく京一も千佳ちゃんも来たのに？」

センパイ 「いいから」

◆センパイ、吾妻を連れて店の奥へ

すると、逃げるのをやめた京一は諦めて座る

京一 「お元気ですか？」

千佳 「お元気ですかって何よ」

京一 「僕は元気です。肌寒い季節となりましたがお体のほうは…」

千佳 「なんで手紙調なの？」

京一 「出そうと思ってたんだけど…」

千佳 「変わってないね。逃げてたくせに」

京一 「逃げてない。ちよつと距離をおきたくて」

千佳 「一緒じゃない」

◆短い間

千佳 「その、私たちがまだ別れてないよね？あれから話もしてないし、だから」  
京一 「そのことだけど！…もう、終わりにしよう」  
千佳 「え？」  
京一 「…ほら、あの時は『俺が何とかしなくちゃ』って、無理してたし。  
周りが結婚したりして、焦ってたって言うか」  
千佳 「ちよつとまって」  
京一 「もう無理するのはやめたんだ。今はもうヒーローでもなんでもない」  
千佳 「そうね。でも私、ヒーローだから付き合ってたんじゃない」  
京一 「とにかく、もう終わりにしよう。ずっと待っていてくれたのにゴメンな」

◆短い間

千佳 「京一。…私待ってたわけじゃないよ？」  
京一 「え？だって、時々店に来てたってセンパイが」  
千佳 「それは、ちゃんとお別れを伝えようと思ったから」  
京一 「そ、それなら、電話でもメールでもできたんじゃない」  
千佳 「私そこまで今どきの子じゃないよ。前を向くためにちゃんとしたかったの」  
京一 「そっか、そうだったんだ。…はは、俺なんか恥ずかしいわ」  
千佳 「やっぱり変わってないね」  
京一 「これでも30超えて心境の変化もあったんですけど」  
千佳 「うん、わかる。でも京ちゃんの一番いいところは変わってないよ」  
京一 「…千佳」  
千佳 「ん？」  
京一 「いや、なんも」  
千佳 「そ？（時計をみて）あ、そろそろお迎え行かなきゃ」  
京一 「だれの？」  
千佳 「息子の」  
京一 「息子いるの?! だれ、あ。なな、何歳？」  
千佳 「1歳半。コレがかわいくってね。写真見る？」  
京一 「いい、いい。それにもう行かないとまずいんでしょ？」  
千佳 「そうね。じゃ、また」  
京一 「うん。すっかり、おかあさんやってるんだな」  
千佳 「新米ですけどね」

◆千佳、店を出ようとして、立ち止まり振り返る

千佳 「また今度お店来るから。家族で」  
京一 「ああ」

◆千佳、店を出る  
ゆつくりとセンパイと吾妻が戻ってくる

京一 「センパイ。知ってたんですか？」  
センパイ 「まあね。意外に親ばかだよ、千佳ちゃん」  
京一 「何で黙ってたんですか？」  
センパイ 「言う暇なかっただろう。それに」  
吾妻 「京一君、街コン行こうか？僕が指南してあげるよ。  
吾妻式モテトーク術を伝授しよう」  
京一 「ちよつとそれだけは勘弁してください」  
吾妻 「きょういち冷たい！」

◆3人、笑う

センパイ「吾妻、本当に豆切れてたわ。一杯サービスするから

おつかい頼まれてくれないか？」

吾妻「いいですけどー」

センパイ「頼む」

◆吾妻、店を出る

センパイ「あ、パイナップルも切れてた（電話を取り出し）吾妻？悪いんだけど

パイナップルを…」

◆センパイ、電話しながら店の奥へ去る  
すると入れ替わりでガドーが店へ入ってくる

京一「あ…」

ガドー「…」

京一「…」

◆ガドー、お辞儀をする。

ガドー「…」

京一「…」

◆ガドー立ち去ろうとする。

京一「あ」

ガドー「（立ち止まり振り返る）」

京一「おめでどう…。子供…」

◆ガドー驚いた顔ですこし見つめ、お辞儀をする。

頭を上げると、踵を返し店を出る。

入れ代わりでセンパイが戻ってくる。

センパイ「…あのときのこと、千佳ちゃんに話さなくて良かったのか？」

京一「なんのことですか？」

センパイ「おまえなんだろう？ガドーを助けたの」

京一「違いますよ」

センパイ「それに、お前がヒーロー資格を剥奪される理由もわからん」

京一「終わったことじゃないですか」

センパイ「終わってない。街を荒らしたのはガドーだ。そりや、ヒーロー協会の記録には

お前の疾風怒濤が残ってるかもしれないが…。理由を説明してくれと頼んでも

取り合ってくれない」

京一「なんでセンパイが怒ってるんですか？」

センパイ「なんでお前は怒ってないんだ？」

◆京一、コーヒーを一口すすする

京一「にがいなあ。…俺が頼んだんです」

センパイ「は？どういうことだ？」

◆京一、ポケットから、指輪のケースを取り出して

京一 「これが正解だったかなんて、3年考えても全然わかんなくて。でも……」

◆少しの間

京一 「でも、俺は、大好きな人が、大好きな人を失うのを、見たくなかったんですよ」  
センパイ 「……」

京一 「(ケースを指で転がし)こんなもの、どうするつもりだったんだろう、俺は」  
センパイ 「お前は。京一お前はなんでそう……」

京一 「センパイ。俺、今超ヒーローっぽくないですか？」

◆センパイ、静かに数回うなずき、京一の肩をたたいたその手で背中をさする。  
京一も泣いているか泣いていないかわからないくらい、小刻みに震える。

センパイ 「不器用なんだろうな」

◆吾妻が店に戻ってくる

吾妻 「センパイ、豆売り切れてました。一応行ったんだし、おごってくださいませよね？」  
センパイ 「お前は」

吾妻 「あれ？京ちゃん泣いてんの？」

京一 「泣いてないよ」

センパイ 「お前は空気がつてもんを読みなさい」

吾妻 「すみません」

◆センパイと吾妻、じゃれあうように小競り合い。

京一、コーヒーに砂糖をいくつか入れてかき混ぜる。

一口飲んで脇に置き、はにかみながら二人の様子を見守る。

— 完 —

■カーテンコール

暗転後、役者陣舞台中央に集合し、全員でお辞儀をし幕を下ろす。タイミング要調整。